

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：33301

研究種目：若手 B

研究期間：2009～2013

課題番号：21720059

研究課題名（和文）西洋音楽受容研究-アドルフォ・サルコリにみる「官」と「民」

研究課題名（英文）Non-governmental Contribution to the Introduction of Western Vocal Music to Japan: National-school Groups and Adolfo Sarcoli

研究代表者

直江学美（NAOE MANAMI）

金沢星稜大学・人間科学部・准教授

研究者番号：90468976

研究成果の概要（和文）：史料収集では、250 点を越える史料を見つけた。弟子たちは、プッチーニなど、当時、存命していたイタリア系作曲家の新曲を歌っていた事を明らかとした。イタリアでは、出生証明書や新聞記事を発見、イタリアでの活動の一端を明らかにできた。ただ、大都市での演奏歴や演奏批評は見つかっておらず、今後も調査する必要がある。サルコリの人間関係に結びつくような固有名詞もみられ、今後の研究に結びつくと考える。本研究によって、これまで明らかになっていなかったサルコリの活動内容を日本、イタリア両国で明らかにし、民間にしながら、西洋音楽を受容する一端を大きく担ったサルコリの活動を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

What I had to do first was to search for printed and hand-written material regarding Adolfo Sarcoli, because no substantial information about his activities in Japan was available. Consequently, I came across 250 more ephemeral materials, on the topic of Sarcoli. This accumulation made it possible for me to find that songs he taught to sing specifically included those by such contemporary composers such as Puccini.

On the other hand, I collected material in Italy as well, and discovered his birth certificate and a handful of newspaper articles which enabled me to take a look at some of his activities prior to his coming to Japan, while, in some newspaper articles and personal letters, a certain number of personal names related to Sarcoli are found.

I haven't yet encountered material concerning his performances and the reviews of them in such large cities as Rome, and am planning to do further research in the near future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21 年度	700,000	210,000	910,000
22 年度	700,000	210,000	910,000
23 年度	500,000	150,000	650,000
24 年度	400,000	120,000	520,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学

1. 研究開始当初の背景

西洋音楽受容史を考察するために、一人の民間人、アドルフォ・サルコリに光を当てる。サルコリは、イタリア人テノール歌手で、明治

44 年、中国動乱を避けて偶然日本に立ち寄ったとされる。作曲家プッチーニとも親交があり、「6 大テナーの一人」としてイタリアでオペラに出演していたというプロフィール

が、サルコリの弟子たちのプログラムにみられ、当時のイタリアで最先端とされる情報を持ち、歌の技術を身につけていたとされている。しかし、本研究者のこれまでの調査では、これらはサルコリ本人の口から伝わったものが多く、真偽の多くは確定出来ない。

当時、日本の音楽界で中心的な役割を担っていた東京音楽学校では、声楽の教授陣はほぼ「ドイツ系」であった。それら「ドイツ系」教授のもとで学ぶ学生たちは「ドイツ系」レパートリーを身につけたことは自然であったが、イタリア人であったサルコリとは、当時「イタリア系」対「ドイツ系」と見るものもいた。サルコリ自身は、東京音楽学校から距離を置き、四谷の自宅での教授活動のみを行い、三浦環、関屋敏子など世界で活躍する優秀な弟子たちを育てることとなる。

しかしながら、サルコリの活動等は、現在、日本の音楽史上からはほとんど消えかかっている。この理由には、サルコリが民間にいたため、資料等がまとまっていない事があげられる。一方、官立の学校である東京音楽学校関係者は、資料なども多く、正當に評価され、歴史に残る事が多い。サルコリの存在を消してしまうのは、日本における西洋音楽受容の歴史の中で、歪んだ歴史を作ってしまう事に他ならず、今の時点で、サルコリの調査、研究を行い、歴史的観点により、その存在意義を確認することが急務であり、よって、本研究が必要であると考へた。

2. 研究の目的

日本において西洋音楽、特に西洋の歌唱方法が受容されていく過程を、一人のイタリア人、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)に注目する。特にサルコリを取り巻く「民」を調査することにより、「官」と「民」がそれぞれどのような関係を持って日本の西洋音楽受容がなされていったかを明らかにしたい。

3. 研究の方法

より多くの一次史料を集めることを中心に調査をすすめる。特にサルコリと直接面識があり、遺品も受け継いだ方に協力をいただく。また、サルコリのことを「私楽派」(太田勤之「私楽派の人サルコリ」『音楽月報』5月号、1936;8-9)とした記述が、サルコリが死去した際の雑誌に、また、東京音楽学校が学生たちに、サルコリのもとに習いに行くことを禁止したとの記載も文献にみられる。初年度は、資料調査と、文献調査を中心とし、サルコリの詳細な調査をおこなった。

次年度以降は、協力者が所持している、サルコリから引き継いだ、未整理状態の資料整理を本格的におこなった。サルコリがイタリアから日本に持ち込んだとされるイタリア歌曲の数々、また、弟子たちが当時行った

演奏会のプログラム等がある。これらの情報を元に「官」である東京音楽学校で行われていた演奏会や、使用していた楽譜との比較をおこなった。また、できるだけ多くの、サルコリの記述を集めるために、当時の新聞、雑誌、サルコリと交流のあった各所の史料を広く調査した。

また、サルコリのイタリアでの活動の調査のため、イタリアのシエナ、マルタ島、ミラノで史料調査をおこなった。

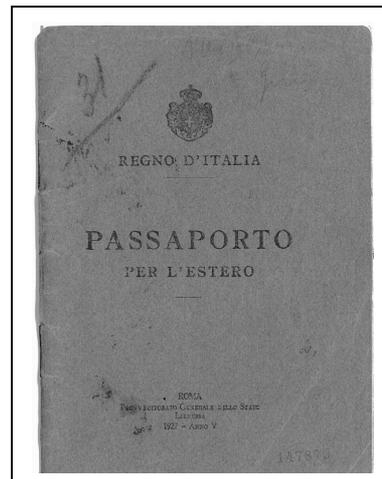
4. 研究成果

研究過程で、これまで見つかっていなかった遺品や史料を発見した。

新聞(51点)プログラム(54点)雑誌(27点)手紙・はがき(130点)その他(155点)本報告書の中でそのうちのいくつかを紹介しつつ、研究成果の報告としたい。

(1) アドルフォ・サルコリ

2009年の調査で発見したサルコリの遺品の中にパスポートがある。2冊あり、1冊は1927年(写真1)、もう1冊は1930年のものである。

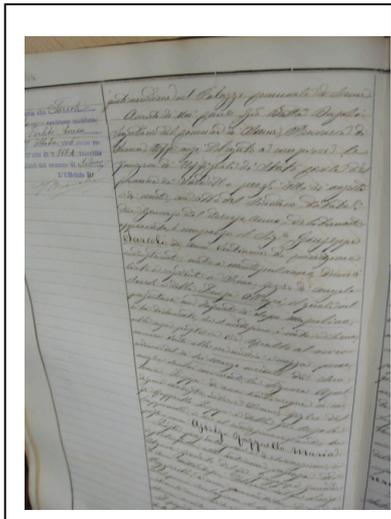


(写真1: 1927年のパスポート)

記載事項は「1927年:父ジュゼッペ(Giuseppe),母リッピ・アポロニーア(Lippi Apollonia),1867年3月6日シエナ生まれ,シエナ在住,歌手(Artista di canto),身長170センチ,62歳,額:高い,目:栗色,鼻:普通,口:ちょうど,髪:栗色,あご髭:栗色,口髭:ねずみ色,顔色:ピンク色,額に傷あり。」

その他、2通のパスポートを発見した。それらの記載事項を比べると、サルコリの職業が1927年時点では、アーティスト、1930年にはマエストロとなっている。この間のパスポート等職業を記載したものはまだ見つからないが、少なくとも4年の間にサルコリの職業に関する記載が「歌手」から「教師」に変更していることが明らかになった。

2010年7月27日、シエナ市役所でサルコリの出生証明書を発見した(写真2)。出生証明書(証明番号 203,1867年)によると、1867年3月6日11時30分生まれ。男児。苗字はサルコリ、名前はアストロフォ。洗礼名はラファエッロ・マリア。父、ジュゼッペ、母、リッピ。1906年10月27日ミラノにおいて、フェルリート・テレーザと結婚(ミラノ市役所での証明番号 868/A)とあった。日本では、アドルフォ・サルコリで通っていたが、本名はアストロフォであることが分かった。しかし、これまでに見つけれられた資料の中で、名前が変わったことに関する記述は出てきていない。



(写真2: 出生証明書)

また、日本では、サルコリの生年に関していくつかの説がみられた。ほぼ1872年か1867年のどちらかとなっており、1872年生まれ説は、当時の「音楽年鑑」に記されていたとみられ(牛山充 1962: 1)、日本における文献の多くがこれに従っていた。1867年説は、没後に見られるようになる。また、墓石には1867年生まれとなっている(1999.6.3)。これ以外に、数は少ないが1874年、1875年もある。

1875年生まれというのは、来日時に行われたインタビューでサルコリ自身が語ったものであり(M, U, 生 1911: 33)、1874年は、彼のパスポートの一つに記されている生年である。そのパスポートによると、1874年5月26日シエナに生まれ、ミラノ在住、アーティスト、作曲者とある。しかし、今回の出生証明書の発見により、サルコリの生年が1867年ということが証明された。

(2) 新聞に見られるサルコリ

サルコリの資料が少ない日本において、新聞記事は、音楽雑誌と並んでサルコリの活動や当時の人々の捉え方が分かる資料であろう。

死亡記事によれば、サルコリの敬称が「翁」

となっている。当時、サルコリが敬意を持たれていたことが分かる。死亡に関する記事は、読賣新聞、東京毎日新聞、東京日日新聞、時事新報、都新聞、国民新聞にみられ、また、時事新報、報知新聞には、死亡直前にサルコリの危篤の記事、読賣新聞、東京日日新聞は葬儀の記事までも掲載されている。広く新聞紙上に取り上げられているということは、サルコリが音楽関係者のみならず、広く一般人にとってもある程度認知されていたことの表れであろう。各紙のサルコリに対する記載は以下の通りである。

「我が楽壇の恩人」(『時事新報』1936年3月13日)「我が声楽界の恩人」(『国民新聞』1936年3月13日)「声楽界の恩人」(『都新聞』1936年3月13日)「我声楽界の父」(『東京日日新聞』1936年3月13日)「わが楽壇最大の恩人」(『読賣新聞』1936年3月13日)「わが楽壇の“歌の父”」(『東京朝日新聞』1936年3月13日)「我楽壇の恩人」(『報知新聞』1936年3月12日)「孤独の翁」(『読賣新聞』1936年3月13日)「我声楽の父」(『時事写真速報』1936年3月14日)「楽壇の父」(『東京日日新聞』1936年3月13日)「イタリーの音楽を日本に紹介した楽壇の恩人」(『城南時事』1936年9月5日)

死亡関連記事以外では、サルコリと弟子達の関係に関するものが多い。世に知られた、三浦環、関屋敏子の「先生」としての記事、また弟子がそれぞれ外国で活躍する様子が書かれている。特に、「関屋敏子独唱会」と題された記事でも、サルコリが中心に座る客席の写真が使われており、本文の中でもサルコリに言及がされている(「関屋敏子嬢の獨唱會」『報知新聞』1930年12月2日)。サルコリ存命中、日本の新聞におけるサルコリに関する記述の多くは、三浦環、関屋敏子、喜波貞子の師としての記事であり、サルコリの存在は「テノール歌手」としてより「声楽教師」として知られていたのであった。

来日当初「声楽家」とされたサルコリは、晩年になるに従って「恩人」「楽壇の父」「歌の父」「樂聖」と敬意を持って紹介されるようになる。特に、「声楽の開發者」や「イタリーの音楽を日本に紹介した楽壇の恩人」という言葉からは、サルコリが日本の音楽界に、新しい一石を投じた存在と認められていたことがうかがえる。また、「父」という言葉からは、サルコリが日本の西洋音楽の「生みの親」として認識されていた。読賣新聞に至っては「わが楽壇最大の恩人」と最上級の敬意を払っている。それらは、音楽専門誌ではなく、一般の新聞紙面に掲載されているということから、サルコリの存在は音楽界に留まらず、一般人にも知られていたことが明らかとなった。

(3) レポートリー

(3)-1 弟子たち

2009年から2010年にかけて行った、史料調査によって、サルコリが所持していた、または関係していたとみられるプログラムを発見することが出来た。

今回、見つかった資料のうち、サルコリの弟子たちに関係するものは、1934年(昭和9年)に行われた「第二回『シエナ會研究發表演奏會』」[資料(1)], 翌1935年(昭和10年)3月20日に行われた、「第三回『シエナ會研究發表演奏會』」, 同じく、2日後、3月22日に行われた「第三回『シエナ會研究發表演奏會』」[資料(2)], サルコリの死去後、1936年5月3日に行われた、「建碑基金募集の爲め『故ア・サルコリー先生謝恩大演奏會』」[資料(3)]である。この他、第一回シエナ会の演奏会の歌詞解説のみが、見つかっている。

作曲者	国	時代[年]	回数
*プッチーニ	イタリア	1858-1924	18
ヴェルディ	イタリア	1813-1901	17
カタラーニ	イタリア	1854-1893	4
ドニゼッティ	イタリア	1797-1848	6
ボンキエッリ	イタリア	1834-1886	1
ベッリーニ	イタリア	1801-1835	7
*デ・キアラ	イタリア	1860-1937	2
*ドリゴ	イタリア	1846-1930	1
アルディーティ	イタリア	1822-1903	1
*レオンカヴァッロ	イタリア	1857-1919	1
*マスカーニ	イタリア	1863-1945	2
ペルゴレージ	イタリア	1710-1736	1
*トゼッリ	イタリア	1883-1926	1
*トスティ	イタリア	1846-1916	1
グノー	フランス	1818-1893	3
ビゼー	フランス	1838-1875	2
*ドリーブ	フランス	1836-1891	4
トーマ	フランス	1811-1896	3
*マスネ	フランス	1842-1912	1
イラディエル	スペイン	1809-1865	3
マイエルバール	ドイツ	1791-1864	2
*ベネディクト	ドイツ	1804-1885	5
ビショップ	イギリス	1786-1855	3
*プロッホ	オーストリア	1809-1878	1
モーツァルト	オーストリア	1756-1791	2
*関屋敏子	日本	1904-1941	3
ルロー	不明		1

プレア	不明		1
アウヴァレ	不明		1

(表1: 作曲者の一覧: *印はサルコリ来日時、1911年に存命していた作曲家)

シエナ会は、サルコリの門下生の会である。そのシエナ会が主催するコンサートのプログラム、のべ99曲の内わけは、イタリア人作曲家63曲、フランス人作曲家13曲、スペイン人作曲家3曲、ドイツ人作曲家7曲、イギリス人作曲家3曲、オーストリア人作曲家2曲、日本人作曲家3曲、スイス人作曲家1曲、不明が3曲であった。イタリア人作曲家の曲が特に群を抜く。また、弟子が関係している演奏会で行われたプログラムも見付き、それらにより、のべ42曲のレパートリーが明らかになった。うちわけは、イタリア人作曲家24曲、フランス人作曲家3曲、ドイツ人作曲家2曲、スペイン人作曲家2曲、日本人作曲家9曲、不明1曲であった。弟子が関係しているプログラムにおいても、やはりシエナ会同様、イタリア人作曲家の曲が多い。全体として、シエナ会の作曲者、曲名が多く重複していることが分かった。

(3)-2 サルコリ

2010年(シエナ市立図書館)と2012年(ミラノ市立図書館, ミラノ音楽院附属図書館)でおこなった調査では、サルコリ存命中のイタリアの音楽家大辞典”Dizionario Universale de, Musicisti”や他の音楽家辞典などには、サルコリの名前はみられなかった。しかし、サルコリの死後2年の後、1938年に発行された”Dizionario Universale de, Musicisti”の中に”Tenore, n. nel 1866 a Siena, m. il 7 agosto 1936 a Tokio, da molti anni domiciliato al Giappone, dove insegnava il canto” (テノール歌手。1866年にシエナで生まれ、1936年8月7日に東京で没する。多くの年月、声楽を教えていた日本に住んだ。)という記載がみられた。このほかに、サルコリの公演に関する記事が掲載された新聞記事を10件見つけた。(写真3)



(写真3)

それら新聞紙上でみる、サルコリの公演に関する演奏会評には「我らがシエナ人、アドルフォ・サルコリ(ジョルジョ・スッリ先生の弟子)に対し、一般人の関心が集まっていたのだが、それはまた厳しい競争をくぐりぬけ、貴重で重要な役においてデビューを果たしたからである。[...]デビューしたてとしてはまれな程の表現力がある。彼によって、観客に非常に熱狂を引き起こした」(“Gazetta musicale di Milano” 1897)、「サルコリ氏はその卓越した人間性と良い演技と申し分のない演奏によって完璧なロドルフォであった。[...]本当に特別な賞賛に値する」(“Gazetta musicale di Milano” 1902)など、イタリアでの演奏に対する観客の熱狂と、「ラ・ボエーム」の主演、ロドルフォを演じ、特別な賞賛を受けたとの記事が並ぶ。1897年はサルコリがデビューしたとされる年で、記事の中にも「デビューしたて」の言葉がみられる。また、1902年の記事は、取り上げられた他の演奏者に対しては”buono(良い)”が使われているが、サルコリだけは”perfetto(完璧)”が使われている。記事の主旨は、オペラ全体に対する批評であったが、特にサルコリの功績を讃える文章となっており、サルコリがオペラの成功に大きな役割を果たした名演を行ったことが分かる。ただ、これらはいずれも、サルコリが生まれ育ったシエナ地方の演奏に対する批評である。サルコリが一時住んでいたミラノ、またローマなどの大都市での演奏歴や演奏批評は今はまだ見つかっておらず、サルコリの評価はイタリア全国的なものであったのか、今後も調査する必要がある。

尚、注目すべきこととして、1897年記事の中に、ジョルジョ・スッリ氏の弟子であったことを発見することが出来た。これは、サルコリがどのような教育を受けていたか明らかにするうえで、貴重な情報である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

直江学美, アドルフォ・サルコリの演奏活動について—海外を中心に—, 金沢星稜大学人間科学研究, 査読なし, 第4巻 第1号, 1912, 29-34

直江学美, 日本におけるベル・カントの父, アドルフォ・サルコリの生涯, 金沢星稜大学人間科学研究, 査読なし, 第4巻 第2号, 2011, 41-44

直江学美, 日本の演奏会プログラムより見た西洋声楽受容の一考察, 金沢星稜大学人間科

学研究, 査読なし, 第4巻 第1号, 2010, 11-27

直江学美, 日本の新聞記事に見られるアドルフォ・サルコリ, 金沢星稜大学人間科学研究, 査読なし, 第3巻 第2号, 2010, 47-49

[学会発表] (計1件)

直江学美, 学術シンポジウム: アドルフォ・サルコリからみた日本の音楽界—明治から昭和初期を中心に—平成25年2月18日(月) 主催: 金沢星稜大学総合研究所, 金沢星稜大学直江研究室 於: 北國新聞社 赤羽ホール

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

直江学美 (NAOE MANAMI) 金沢星稜大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 90468976